

## 青年の死別経験に対する意味の付与と死別経験後成長感

山田 健斗<sup>1</sup> 新井 邦二郎<sup>2</sup>

本研究ではまず、青年の死別経験後成長感尺度を作成し、死別経験後の成長感の測定を試みる。次に死別経験に対する“意味の付与”とその経験から生じると考えられる“成長感”との関連について検討することを目的とする。調査対象者は大学生222名。死別経験のあった149名を分析対象とした。

主な結果は次の通りである。①30項目からなる死別経験後成長感尺度が作成され、「自分自身の成長」、「人間関係の成長」、「死の悲しみからの脱却」、「生きることの再認識」、「生死の思索」の5因子が見出された。②死別経験に対する意味の付与尺度の下位尺度である「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別を経験した自己に対する評価」「死別の持つメッセージ性のキャッチ」はそれぞれ「死別経験後成長感」に有意な正の影響を与えていた。③「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」は死別経験後成長感の下位尺度である「自分自身の成長」「人間関係の成長」「死の悲しみからの脱却」「生きる事の再認識」「生死の思索」に対し有意な正の影響を与えていた。④「死別を経験した自己に対する評価」は「自分自身の成長」「死の悲しみからの脱却」に有意な正の影響を与えていた。⑤「死別の持つメッセージ性のキャッチ」は「人間関係の成長」「死の悲しみからの脱却」「生きることの再認識」「生死の思索」に有意な正の影響を与えていた。⑥意味の付与のもう一つのあり方を測るのものと使用した「故人や出来事からの回避」は「生死の思索」のみに有意な正の影響を与えていた。

以上の結果から「死別経験に対する意味の付与」と「死別経験後成長感」における関係が明らかになった。

キーワード：死別経験, 意味の付与, 死別経験後成長感, 大学生

### 問題と目的

人生は出会いと別れの連続である。長く生きていればいるほど多くの出会いを獲得し、それを喪失していく。Deeken(2001)は、「人の一生は出会いと別れの連続であり、出会いの喜びのあとにめぐってくる別れの経験は自分の一部が死ぬようなものだ。こうした小さい死を通して新たな自己を誕生させることが別れの持つ積極的な意義と考える」と、出会いと別れの関係について述べている。別れはストレスの高い出来事としての対象喪失とみなされる。小此木(1979)は対象喪失を「愛情や依存の対象を、その死によって、あるいは生き別れによって失う体験」と定義している。対象喪失の中でも重要な他者を喪失する死別経験は最も辛いものである(大塚, 2008)。重要な他者との死別経験といっても、両親との死別、配偶者との死別、きょうだい・恋人・友人との死別など、対象やその関係性は様々である。また死別経験者自身も年齢や人生経験が様々である。その中でも岡田(2009)は、アイデンティティを確立する途上にある青年期の大学生に死別

体験は危機的な事態を引き起こす可能性もあり、そうした状況にある学生に対する心理的支援が非常に重要であることを指摘している。

また従来の死別研究の多くは、死別経験後の遺族のネガティブな変化をもたらすものとして捉えて、遺族の身体的・精神的不適応等からの立ち直りへの援助に焦点をあてるものである(ex. Worden, 1991; 松井, 1997)。このように死別の経験を悲嘆などのネガティブな側面として捉え、それに対する支援などへのあり方の追求が死別研究の従来の多くの姿である。しかし近年、ストレスイベントがポジティブな結果をもたらす“ストレス関連成長”の概念が注目されるようになった流れの中で、死別経験後の肯定的な変化や人間の成長に着目した研究も行われるようになってきている(奥芝・島谷, 2014)。“ストレス関連成長”だけでなく、“心的外傷後成長”(Post Traumatic Growth; PTG)や困難な状況の中での有益性を見出しネガティブな要因を緩和する“有益性発見”などの概念が近年、提唱されていることもそうしたことの要因と考えられる。またDeeken(1983)は、苦痛に満ちた悲嘆のプロセスを経て、人は新たなアイデンティティを獲得し、より成熟した新しい人間として生まれ変わると述べている。つまりネガティブな出来事である死別経

1 東京成徳大学大学院

2 東京成徳大学

験から我々は自己成長へとつなげることが出来ると示唆される。東村・坂口・柏木（2001）は、死別経験によって遺族自身がポジティブに変化したと感じている内容とその程度を測定するための尺度を作成し研究している。

しかし死別経験からの成長ということに関する研究の多くは、成人期以降の人を対象としている。例えば上記の東村ら（2001）の研究では、死別経験者の年齢は平均54.9歳（SD=13.3）の人を対象としている。渡邊・岡本（2005）も高齢者を対象に死別経験後の人格的発達を検討している。この研究の中で渡邊らは、対象者の平均年齢が高齢層であったことを考慮すると、死別経験のみが影響を与えるというよりは、これまでに幾度か遭遇したであろう人生における危機場面の経験もこの研究結果に少なからず影響を及ぼしている可能性は否定できないと述べている。こうした状況を踏まえて渡邊（2011）は、青年期において死の恐怖や不安に関する検討は多くなされているが、身近な他者を喪うことによる成長・発達についてはほとんど検討されていないということを指摘している。このことから青年の死別経験に関する研究は必要と考える。

他方で、宅（2004, 2005）は青年がストレス体験から自己成長感を抱くまでのメカニズムについて質的研究と量的研究の双方向から検討を行っている。その結果、ストレスフルな出来事にまつわる一連の体験や、その主体としての自分自身に特別な意味を付与することが自己成長感を生み出すと述べている（宅, 2004）。ここでいう“意味の付与”とは、①出来事のもつメッセージ性のキャッチ、②ポジティブな側面への焦点付け、③出来事を経験した自己に対する評価の3領域からなっており、ストレス体験が自己成長感につながるためには、この“意味の付与”が重要なカギとなっている。このように、ストレス体験を捉える場合においても、引き続いて生じるネガティブな結果をいかに緩和・低減させるかという視点のみではなく自己成長感もたらされる可能性もあるという観点が重視されるようになってきている。なお宅の研究ではストレス体験として挙げられているものは死別経験に限らず多様である（例:受験, 失恋, 停学, 友人との喧嘩など）。その中で宅（2010）は、青年にとって他者の死が心理的成長にとってどのような意味をもたらすか、もし成長のきっかけになりえるならば、それがどのようなメカニズムで体験されているのかについて、個別に検討していく必要があるということを示唆しており、青年にとって死別経験と自己成長はどのような関連があるのかを検討する必要があることを示唆している。

そこで青年が他者との死別経験に対してどのように“自己成長感”を抱いていくのかを検討していきたい。では、青年は死別経験から自己成長感をどのように導いていくのだろうか。そこでは、宅のストレス体験の

研究から示唆されるように“意味の付与”が関与すると考えられる。

そのため本研究ではまず、青年の死別経験後成長尺度を作成し、自己成長感の測定を試みる。次に死別経験に対する“意味の付与”とその経験から生じると考えられる“自己成長感”との関連について検討することを目的とする。

## 方 法

### 1.調査対象者

首都圏の大学生1～4年男女222名に対し質問紙調査を配布し、回答を得た。そのうち死別経験がない61名と不適切な内容だと思われる回答12名を除外し、149名（男性44名、女性105名）を有効回答とし分析を行った。調査対象者と故人の属性についてTable1に示す。また故人と調査対象者との関係などのデータをTable2に示す。

Table 1 調査対象者と故人の属性

性別 (対象者)	年 齢		性別 (故人)	年 齢	
	平均	SD		平均	SD
男性 44人	18.85歳	1.10	男性 88人	68.59歳	22.86
女性 105人			女性 61人		
計 149人			計 149人		

Table1に示すように、調査対象者の男性の数が少なめであった。そのため結果の分析においては性を分けずに行うこととする。また故人の性別は男性が多く、平均年齢は約70歳近くであった。

Table 2 故人と対象者との関係など（数字は人数とする）

関 係	期 間*		原 因		
親	2	半年以内	7	事故	8
きょうだい	2	半年以上	5	病気	108
祖父母	104	1年以上	17	事件	1
友人	11	2年以上	23	自死	5
恋人	0	それ以上	97	老衰	25
その他	30			その他	2
計	149		149		149

\*故人がなくなってから調査時までの期間

Table2に示すように、故人は調査対象者から見て「祖父母」が圧倒的に多かった。また故人が亡くなったからの期間2年以上経過しているケースが多く、原因は病気や老衰によるものがほとんどであった。

### 2.調査の時期ならびに手続き

2015年6月。下記の調査内容から構成される無記名自記式質問紙を講義時間内に配布し回収を行った。質問紙には①強制的ではないこと②途中で回答を止めても構わないこと③個人の回答を公開することがないこと④結果を研究目的のみに使用し統計データとして分析すること⑤回答情報を処理から保管処分まで厳重に

保護することを明記した。なお、東京成徳大学大学院心理学研究科の研究倫理審査において承認されている(承認番号15-1-19)。

### 3.調査内容

まずフェイス項目として次のこと(対象者の年齢・性別・死別経験の有無・故人の年齢・性別・対象者との関係・期間・原因)を尋ねた。その後、4種類の尺度・質問紙から構成される調査を行った。死別経験後成長感に関するもの、死別体験に対する意味の付与に関するもの、故人や出来事からの回避に関するもの、楽観的志向性・悲観的志向性に関するものの4種類である。

#### ①死別経験後成長感質問紙

「身近な他者との死別経験を持ったことがその人の成長にどのような影響を与えるのか」について測定する。質問紙は以下のような既存のいくつかの尺度から成長や人格発達に関わる内容の項目を選定し、作成したものである。選定した尺度の概要を以下に示す。

a) 死別対処尺度…坂口・柏木・恒藤(2001)によって作成された「家族との死別に対する対処行動」を測定する尺度である。当尺度からは「故人なしでも頑張っていこうと自分を励ました」など、死別経験後の「生活・人生志向」に関わる内容の5項目を選定した。

b) 日本語版外傷後の成長尺度…Taku, Calhoun, Tedeschi, Gil-Rivas, Kilmer, & Cann(2007)によって作成された「外傷後の成長」を測定する尺度の日本語版である。当尺度からは「他の人達との間で、より親密感を強く持つようになった」など、「他者との関係」「新たな可能性」「人間としての強さ」「精神性的変容および人生に対する感謝」に関わる内容の8項目を選定した。

c) 有益性発見尺度…坂口(2002)によって作成された「死別経験に対する有益性発見」を測定する尺度である。当尺度からは「後悔しないように日々を生きていこうと教えてくれた」など、「生きることへの感謝」に関わる内容の3項目を選定した。

d) ストレス体験をきっかけとした自己成長感尺度…宅(2005)によって作成された「ストレス体験に起因する自己成長感」を測定する尺度である。当尺度からは「命の大切さを実感した」の1項目を選定した。

e) 青年期の死別経験後の人格の発達尺度…渡邊(2011)によって作成された「青年期における死別経験後の人格発達」を測定する尺度である。当尺度からは「人とのつながりを大切にするようになった」など、「他者理解の深化」「生と死への関心」「死への恐怖と命の大切さ」「自己の成長」に関する内容の18項目を選定した。

f) 死別経験による成長感尺度…坂口・東村・柏木(2001)によって作成された「死別経験による遺族の人間的成長」を測定する尺度である。当尺度からは「人のやさしさ、思いやりがいつそうわかるようになった」など、「人間関係の再認識」「自己の成長」「ライフスタイル

の変化」「生への感謝」に関わる内容の6項目を選定した。

上記の尺度から選定した他、臨床心理学を専攻とする大学院生3名を対象とした予備調査から得られた項目、すなわち「自分をこれ以上責めなくてもいいと思うようになった」など、「ネガティブな側面からの脱却」に関わる内容の4項目に加え、計45項目からなる質問紙を作成した。「あてはまる」(5点)～「あてはまらない」(1点)の5件法。得点が高いほど死別経験後に成長感を抱いたということを表す。

#### ②死別経験に対する意味の付与質問紙

「死別経験に対して、どのような意味を見出すのか、そして経験の主体である自己に対してどのような評価を行うのか」について測定する。宅(2005)の「ストレス体験に対する意味の付与尺度」のストレス体験を死別経験に置き換えて作成した。「この経験は自分にとって意味のあることだと考えた」などの12項目からなる。下位尺度として「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別を経験した自己に対する評価」「死別の持つメッセージ性のキャッチ」がある。「あてはまる」(4点)～「あてはまらない」(1点)の4件法。得点が高いほど意味の付与を行ったことを表す。

#### ③故人や出来事からの回避質問紙

「故人や死別経験を思い出したり、考えたりすることの回避」を測定する。坂口・柏木・恒藤(2001)「死別対処尺度」の下位尺度「故人からの回避」を参考に作成した。「このことをなるべく考えないようにした」などの4項目からなる。「あてはまる」(4点)～「あてはまらない」(1点)の4件法。得点が高いほど回避をしたということを表す。この質問紙は意味の付与のもう一つの在り方を測るものとして使用した。

#### ④楽観的志向・悲観的志向尺度

「個人の楽観的志向性ならびに悲観的志向性」を測定する。園田・藤南(1998)の「LOT(The Life Orientation Test)日本語版」から本研究で作成する質問紙(尺度)の妥当性を検討するのに適した項目を選定し作成した。「いつも物事の良い面を見ようとする」などの楽観的志向性と「自分が望むようなことは起こらないと思う」などの悲観的志向性がそれぞれ3項目ずつの、計6項目からなる。「あてはまる」(4点)～「あてはまらない」(1点)の4件法。得点が高いほど楽観的志向性・悲観的志向性の高いことを表す。

死別経験後成長感ならびに死別経験に対する意味の付与は、楽観的志向性と正の相関を示し、悲観的志向性とは負の相関を示すと仮定する。

## 結 果

### 1. 死別経験後成長感質問紙の因子分析の結果

死別経験後成長感質問紙の因子分析結果ならびに各項目の平均値と標準偏差をTable3に示す。この質問



紙45項目の各項目（1～5点）の平均値は2.38～4.11の間であった。その中から天井効果が生じていると思われる6項目を除き、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、どの因子からも因子負荷量0.35未満または複数の因子から0.35以上の因子負荷量を受けていた9項目を除き、30項目で再度因子分析を行なったところ、妥当だと思われる5因子が抽出された。

第一因子は「自分に対して肯定的になった」「新しいことに取り組もうという意欲が強くなった」「以前よりも忍耐強くなった」など14項目からなる。死別経験以前と比べて、自己の主體的な成長・変化といった自分自身に関する内容のものが多かったことから「自分自身の成長」と命名した。

Table3 死別経験後成長感尺度の因子分析結果

項目番号	項目内容	I	II	III	IV	V	共通性	SD
I:自分自身の成長( $\alpha$ :.96)								
32	自分に対して肯定的になった	.93	-.07	.07	-.07	.01	.78	2.70 1.04
24	新しいことに取り組もうという意欲が強くなった	.85	.15	-.08	-.09	-.04	.71	2.85 1.18
39	以前よりも忍耐強くなった	.84	-.12	-.08	.15	.08	.71	3.18 1.19
33	以前とは違う新たな視点で今までの自分の生活を振り返ることができるようになった	.82	-.12	-.02	.03	.18	.67	2.94 1.15
20	プラス思考で物事を考えられるようになった	.81	.03	.11	-.05	-.25	.66	2.64 1.19
34	つらいことや悲しいことを乗り越えていける強さをもった	.78	.00	.01	.03	.00	.66	3.17 1.15
23	精神的に強くなった	.71	.12	-.07	.05	-.01	.63	3.02 1.20
31	考え方が柔軟になった	.65	-.01	.10	.07	.12	.67	2.99 1.06
22	困難を乗り越えられようという気持ちを持てるようになった	.62	.17	.05	.08	-.07	.70	2.84 1.16
40	以前よりも人生設計や生活設計を立てるようになった	.58	.01	.04	.13	.03	.52	3.03 1.20
25	「いつかは死んでしまうのだから」と投げやりな気持ちになることが減った	.51	.26	.20	-.13	-.01	.60	2.96 1.20
19	自己中心ではなくなった	.49	.27	.07	.03	.07	.67	2.94 1.09
21	他人を信用できるようになった	.49	.20	.26	.02	-.18	.67	2.70 1.11
35	自分本位の考えや行動をしなくなった	.45	.20	-.22	.25	.11	.57	2.97 1.06
II:人間関係の成長( $\alpha$ :.83)								
9	人との関係に、さらなる努力をするようになった	.08	.89	-.04	-.09	.10	.81	3.06 1.25
6	他の人達との間で、より親密感を強く持つようになった	-.11	.84	.08	.03	.05	.70	3.12 1.22
8	他者に対して、より思いやりの心が強くなった	.07	.73	.05	.01	.02	.69	3.45 1.23
7	自分の感情を、表に出しても良いと思えるようになった	.28	.71	-.12	-.11	-.04	.60	2.67 1.19
18	人とのつながりを大切にしようようになった	.07	.55	.06	.32	-.04	.82	3.54 1.32
10	他人を必要とすることを、より受け入れるようになった	.15	.51	.05	.21	-.04	.69	3.12 1.26
III:死の悲しみからの脱却( $\alpha$ :.83)								
44	落ち込んで何もできない状態は故人に申し訳ないと思うようになった	-.01	-.04	.86	.03	.09	.77	3.06 1.29
43	悲しみ続けていても、故人が喜ばないと思うようになった	.05	.00	.86	-.05	.05	.76	3.23 1.21
2	故人なして頑張ろうと自分を励ました	.09	.07	.45	.06	.10	.41	3.04 1.18
IV:生きることの再認識( $\alpha$ :.88)								
14	後悔しないように日々を生きていこうと教えてくれた	.08	-.15	.08	.95	-.01	.87	3.68 1.28
13	一日一日を、より大切にできるようになった	.01	.18	-.01	.73	-.06	.73	3.62 1.22
41	自分が生きていることを改めて大切に思うようになった	.06	.13	.18	.58	-.07	.88	3.66 1.25
5	自分のこれからの人生について考えた	.11	.17	-.23	.53	.16	.52	3.52 1.23
V:生死の思索( $\alpha$ :.70)								
28	自分の死についてよく考えるようになった	.03	.09	-.002	-.09	.79	.63	3.52 1.22
27	生きるとは何だろうとよく考えるようになった	.13	-.09	.12	-.06	.71	.57	3.52 1.13
19	人間の力でどうにもならないことがあると思うようになった	-.22	.10	.11	.17	.55	.39	3.81 1.12
固有値		15.78	1.45	1.09	.98	.54		
累積寄与率(%)		32.61	37.45	61.07	64.33	66.13		
		因子間相関						
		I	II	III	IV	V		
		I	.77	.63	.72	.37		
		II		.60	.76	.30		
		III			.54	.25		
		IV				.45		
		V						

第二因子は「人との関係に、さらなる努力をするようになった」「他の人たちとの間で、より親密感を強く持つようになった」など6項目からなる。他者との関わりに対する意識の変化や行動の変化、他者を大切にするなどに関する内容のものが多かったことから「人間関係の成長」と命名した。

第三因子は「落ち込んで、何もできない状態は故人に申し訳ないと思うようになった」「悲しみ続けていても、故人が喜ばないと思うようになった」など3項目からなる。死別していった故人について考え、悲しんだままでは故人に申し訳ないなどに関する内容のものが多かったことから「死の悲しみからの脱却」と命名した。

第四因子は「後悔しないように日々を生きていこうと教えてくれた」「一日一日を、より大切にできるようになった」など4項目からなる。生命の大切さや日々を生きることの大切さなどを改めて認識したなどに関する内容のものが多かったことから「生きることの再認識」と命名した。

第五因子は「自分の死についてよく考えるようになった」「生きるとは何だろうと良く考えるようになった」など3項目からなる。生に対する意味の発見、自己の死についてなどのより漠然とした生死への関心に関する内容が多かったことから「生死の思索」と命名した。

死別経験後成長感の項目の因子パターン行列、基本的統計量（平均・SD）、因子回転後の共通性、固有値、因子寄与率、因子間相関はTable3に示したとおりである。なお得点分布は正規分布に近い形となっていた。

## 2. 信頼性の検討

Table3に示したとおり、各下位尺度の信頼性は $\alpha$ 係数が.76～.96の範囲であり、十分な内部一貫性の値を示していた。

## 3. 妥当性の検討

死別経験後成長感質問紙と楽観的志向性・悲観的志向性尺度との関連について、Pearson積率相関分析を行い、その結果をTable4に示す。この結果、「生死の思索」を除く4つの下位尺度と楽観的志向性との間に有意な正の相関（.32～.42）が見られた。悲観的志向性に関しては「自分自身の成長」「人間関係の成長」との間には有意な負の相関（-.21～-.24）が見られた。「死の悲しみからの脱却」「生きることの再認識」とは有意な負の相関（-.01～-.10）は見られなかったものの、どちらも負の相関関係にあることが確認された。また「生死の思索」は楽観的志向性・悲観的志向性ともに有意な相関関係を持たなかった。以上のように概ね死別経験後成長感と楽観的志向性・悲観的志向性との間に仮定通りの正負の相関が見出されたことから妥当

性の一部が確認できた。前記したように信頼性も見られたので、「死別経験後成長感質問紙」を尺度として扱うことにする。

4.死別経験に対する意味の付与質問紙の分析結果

意味の付与質問紙の基本的統計量と下位尺度間の相関、及び楽観的志向性・悲観的志向性との関係をTable5に示す。

Table4 死別経験後成長感尺度の下位尺度と楽観的・悲観的思考性との関係

	平均(標準偏差)	楽観的志向	悲観的志向
自分自身の成長	41.52(12.70)	.42**	-.21**
人間関係の成長	19.45( 6.37)	.34**	-.24*
死の悲しみからの脱却	9.69( 3.09)	.39**	-.01
生きることの再認識	15.13( 4.19)	.32**	-.10
死別の悲哀	11.10( 2.68)	.05	.04

\*p<.05 \*\*p<.01 \*\*\*p<.001

Table5に示すように各下位尺度の信頼性はα係数が.83～.92の範囲であり、十分な内部一貫性の値を示していた。

下位尺度間の相関は「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」と「死別の持つメッセージ性のキャッチ」の関係を除いて全て有意な正の相関であった。また楽観的志向性との関係について「故人や出来事の回避」を含む、全ての下位尺度と有意な正の相関(.18～.29)が見られた。一方、悲観的志向性はどの下位尺度とも負の相関を示したが有意な相関は見られなかった。しかし全ての下位尺度に対してマイナスの相関関係にあることが見出された。以上のように死別経験に対する意味の付与と楽観的志向性・悲観的志向性との間に仮定通りの正負の相関が見出されたことから妥当性の一部が確認できた。以上のことから「死別経験に対する意味の付与質問紙」を尺度として扱うことにする。

5.死別経験に対する意味の付与が死別経験後成長感に与える影響

死別経験に対する意味の付与に関わる4つの下位尺度を独立(説明)変数とし、死別経験後成長感、ならびにその5つの下位尺度を従属(目的)変数とした重回帰分析を行なった。その結果をFig.1～6に示す。VIFの値から多重共線性に問題は見られなかった。

①死別経験後成長感(全体)

Fig.1が示すように、意味の付与の下位尺度である「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別を経験した自己に対する評価」「死別の持つメッセージ性のキャッチ」の3つが死別経験後成長感に有意な正の影響を与えていることが分かった。他方、「故人や出来事からの回避」は有意な影響を与えていなかった。

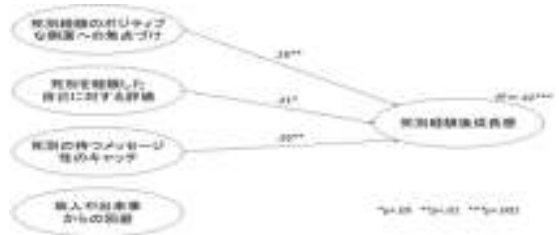


Fig.1 死別経験に対する意味の付与が死別経験後成長感に与える影響

②自分自身の成長

Fig.2が示すように、「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」と「死別を経験した自己に対する評価」の2つが死別経験後成長感尺度の下位尺度である「自分自身の成長」に有意な正の影響を与えていることが分かった。他方、「死別の持つメッセージ性のキャッチ」と「故人や出来事からの回避」は有意な影響を与えていなかった。

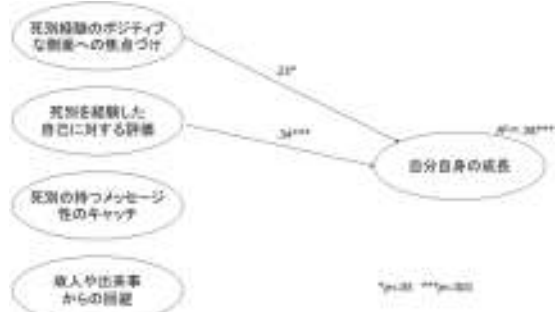


Fig.2 死別経験に対する意味の付与が自分自身の成長に与える影響

③人間関係の成長

Fig.3が示すように、「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」と「死別の持つメッセージ性のキャッチ」の2つが死別経験後成長感尺度の下位尺度である「人間関係の成長」に有意な正の影響を与えていることが分かった。他方、「死別を経験した自己に対する評価」と「故人や出来事からの回避」は有意な影響を与えていなかった。

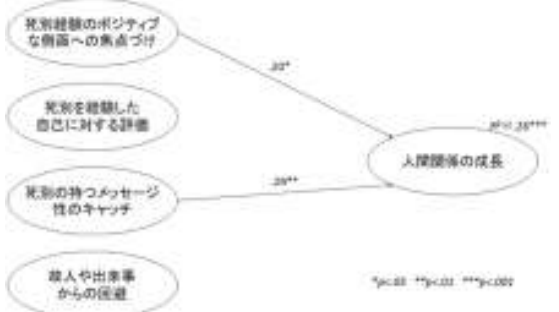


Fig.3 死別経験に対する意味の付与が人間関係の成長に与える影響

#### ④死の悲しみからの脱却

Fig.4が示すように、「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別を経験した自己に対する評価」「死別のもつメッセージ性のキャッチ」のそれぞれが死別経験後成長感尺度の下位尺度である「死の悲しみからの脱却」に有意な正の影響を与えていることが分かった。他方「故人や出来事からの回避」は有意な影響を与えていなかった。

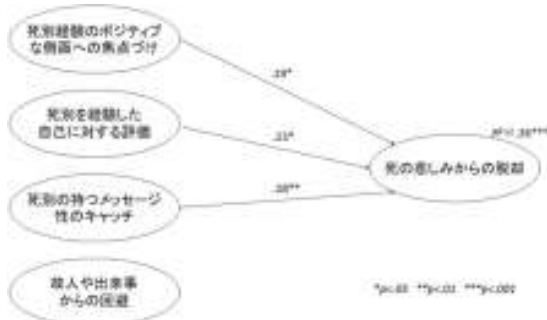


Fig.4 死別経験に対する意味の付与が死の悲しみからの脱却に与える影響

#### ⑤生きることの再認識

Fig.5が示すように、「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」と「死別のもつメッセージ性のキャッチ」の2つが死別経験後成長感尺度の下位尺度である「生きることの再認識」に有意な正の影響を与えていることが分かった。他方、「死別を経験した自己に対する評価」と「故人や出来事からの回避」は有意な影響を与えていなかった。

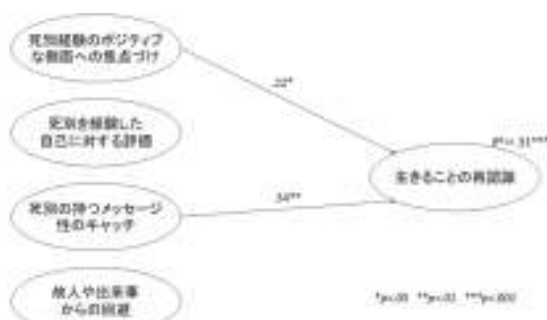


Fig.5 死別経験に対する意味の付与が生きることの再認識に与える影響

#### ⑥生死の思索

Fig.6が示すように、「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別のもつメッセージ性のキャッチ」「故人や出来事からの回避」の3つが死別経験後成長感尺度の下位尺度である「生死の思索」に有意な正の影響を与えていることが分かった。他方、「死別を経験

した自己に対する評価」は有意な影響を与えていなかった。

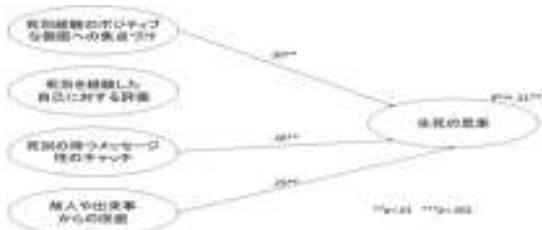


Fig.6 死別経験に対する意味の付与が生死の思索に与える影響

### 考 察

本研究の主な結果は次の通りである。まず死別経験後成長感尺度から見てみる。

- ①因子分析の結果について…因子分析の結果から30項目5因子構造が見出された。第一因子は「自分自身の成長」、第二因子は「人間関係の成長」、第三因子は「死の悲しみからの脱却」、第四因子は「生きることの再認識」、第五因子は「生死の思索」であった。
- ②信頼性・妥当性の検証… $\alpha$ 係数は各因子とも.76～.96と高い値を示していた。また各下位尺度は楽観的志向性と有意な正の相関を示し、悲観的志向性とは有意な負の相関を示していた。これは予想していた結果と同じであった。

次に死別経験に対する意味の付与が死別経験後成長感に与える影響の主な結果について見て行く。まず独立変数からである

- ①死別経験のポジティブな側面への焦点付けについて…この意味の付与は「死別経験後成長感」「自分自身の成長」「人間関係の成長」「死の悲しみからの脱却」「生きることの再認識」「生死の思索」の全ての従属変数に対して有意な正の影響を与えていた。
- ②死別を経験した自己に対する評価…この意味の付与は「死別経験後成長感」「自分自身の成長」「死の悲しみからの脱却」の3つに対して有意な正の影響を与えていた。
- ③死別のもつメッセージ性のキャッチについて…この意味の付与は「死別経験後成長感」「人間関係の成長」「死の悲しみからの脱却」「生きることの再認識」「生死の思索」の5つに対して有意な正の影響を与えていた。
- ④故人や出来事からの回避…この意味の付与は「生死の思索」のみに有意な正の影響を与えていた。

次に従属変数からみた主な結果である。

- ①死別経験後成長感について…これは「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別を経験した自己に対する評価」「死別のもつメッセージ性のキャッチ」の3つから有意な正の影響を受けていた。



②人間関係の成長について…この下位尺度は「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別の持つメッセージ性のキャッチ」から正の有意な影響を受けていたが、「死別を経験した自己に対する評価」からは有意な影響を受けていなかった。

③生死の思索について…この下位尺度は「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別の持つメッセージ性のキャッチ」「故人や出来事からの回避」から有意な正の影響を受けていた。「故人や出来事からの回避」が唯一有意な正の影響を与えていた下位尺度である。

以上の結果に基づいて考察していきたい。

本研究の死別経験後成長感尺度と渡邊（2011）の青年期の死別経験後の人格的発達尺度と比較してみる。本尺度は30項目5因子構造で第一因子は「自分自身の成長」、第二因子は「人間関係の成長」、第三因子は「死の悲しみからの脱却」、第四因子は「生きることの再認識」、第五因子は「生死の思索」であった。これに対して渡邊（2011）のものは36項目6因子構造である。第一因子は「他者理解の深化」、第二因子は「自己・他者信頼感の喪失」、第三因子は「生と死への関心」、第四因子は「死への恐怖と命の大切さ」、第五因子は「自己の成長」、第六因子は「死からの逃避」である。これら第五因子の「自己の成長」を除く因子名を見て分かるように、渡邊のものは死別経験後の成長というよりは死別経験による影響といった意味合いが強いと思われる。このように本尺度は成長に焦点を当て、項目内容を作成していったことから渡邊の尺度と比べて成長や人格発達に合致した内容の尺度が作成できたと考えられる。

次に本研究の意味の付与と宅（2005）の意味の付与の比較をしてみる。本研究は死別経験に対する意味の付与を取り上げた。これに対して宅（2005）では死別経験の他にストレス体験を「自分自身のこと」、「家庭/家族のこと」、「学校/勉強のこと」、「人間関係のこと」の4つの領域に分け、その領域ごとに意味の付与と自己成長感の関連について検討していくものであった。それに対して本研究はこの宅（2005）と異なり、死別経験に対する意味の付与に焦点を当てた研究となっている。

本研究の結果の考察に移るとする。死別経験に対する意味の付与では、「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」が自己成長感の全ての下位尺度に対して有意な正の影響を与えていた。故人の死を無駄にはいけない、そこから何かを学ばなくてはといった姿勢が死別経験後成長感を促す中核的なものと思われる。他方「死別を経験した自己に対する評価」は「人間関係の成長」に有意な影響を与えていなかった。この評価は死別経験をした自分自身を肯定的に評価する意味づけに限定されるため、直接的には人間関係の成

長につながらなかったと考えられる。一方「死別の持つメッセージ性のキャッチ」は「自分自身の成長」に有意な影響を与えていなかった。このことは死別経験からメッセージという抽象的なものをキャッチすることができたとしても、それが自分自身の成長に具体的ににつながりにくいと言えよう。死別経験の持つメッセージ性から自己の在り方や自分自身の将来に対する具体的なビジョンを持つことが難しいのかもしれない。

このほかに「故人や出来事の回避」は「生死の思索」に対してのみ、有意な正の影響を与えていたものの、それ以外の下位尺度と死別経験後成長感全体には有意な影響を与えていなかったことについても言及したい。つまり「故人や出来事からの回避」は一般的には成長感につながらないことになるが、故人や出来事から回避しているのにも関わらず生死の思索という形で回避しても回避しきれない結果が見出された。これは少し予想外の結果であったが、死別という辛く悲しい出来事はそのことを考えないようにするという回避行動をとればとるほど、生や死について考えてしまうという心の動き方が、そこに反映されているとも考えられる。あるいは故人との死別経験が具体的な形から一般的な形への思索に変化したとも考えられる。

最後に本研究の課題としていくつか述べたい。本研究の対象者の男女比が約3:7となっている。そのため男女を比較した分析などが行えなかった。対象者と故人の関係では、「祖父母」104人、「友人」11人、「親」2人、「きょうだい」2人、「恋人」0人、「その他」30人で「祖父母」が圧倒的に多く、故人との関係性による違いの分析を行うことができなかった。祖父母の死は多くが予期でき、突然やってくるものではないと考えられる。その中でもServaty-Seib(2009)は青年期における友人や恋人との死別体験の場合、突然死であることが多く、悲嘆が複雑になりやすいと述べている。また片岡・園田（2008）で青年期は自立する過程の中で愛着・依存の対象を親から友人、さらには恋人へと移していく時期であると青年期における同世代の関係の重要性を述べている。このように青年にとってより衝撃度や悲嘆の複雑性が増す同世代の死別経験に焦点を当てた研究を行うことが課題となろう。それゆえ、「友人」や「恋人」との死別経験を扱うことの意義は大きいと思われる。また本研究は「死別経験に対する意味の付与」と「死別経験後成長感」の概念を用いて量的に分析を行った。しかし死別経験という重大な経験においては意味の付与と成長感の量的関係だけでは語りきれない豊かなものが存在していると思われる。そのため死別経験者を対象としたインタビュー調査などを行い、死別経験後の生の過程などを質的に分析していく研究も必要だと考えられる。

## 文 献

- Deeken, A. (1983). 悲嘆のプロセスを通じての人格成長 看護展望, 8, 881-885.
- Deeken, A. (2001). 生と死の教育 岩波書店
- 東村奈緒美・坂口幸弘・柏木哲夫 (2001). 死別経験による成長感尺度の構成と信頼性・妥当性の検証 臨床精神医学, 30 (8), 999-1006.
- 片岡祥・園田直子 (2008). 青年期におけるアタッチメントスタイルの違いと恋人に対する依存との関連について—久留米大学心理学研究, 7, 11-18.
- 松井豊 (1997). 悲嘆の心理 サイエンス社
- 岡田珠江 (2009). 父の死を契機に家族関係の再構築とアイデンティティの確立を模索した女子学生との描画を用いた面接過程—外的対象喪失と内的対象喪失による喪の仕事の視点から— 学生相談研究, 32, 12-22.
- 小此木啓吾 (1979). 対象喪失 悲しむということ 中公新書
- 奥芝祐子・島谷まき子 (2014). 自死による死別経験後の心理的過程—悲嘆からの回復後の変化に着目して— 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 16, 33-43.
- 大塚小百合 (2008). 喪失体験に対する意味の付与と自己成長感に関する研究—体験領域による生じ方の差異に注目して— 九州大学心理学研究, 9, 119-131.
- 坂口幸弘 (2002). 死別後の心理的過程における意味の役割—有益性発見に関する検討—心理学研究, 73 (3), 275-280.
- 坂口幸弘・柏木哲夫・恒藤暁 (2001). 配偶者喪失後の対処パターンと精神健康との関連 心身医学, 41 (6), 439-445.
- Servaty-Seib, H. L. (2009). Death of a friend during adolescence. In D. E. Balk&C.A. Corr (Eds.). *Adolescent encounter with death, bereavement, and coping*. —New York:Springer Publishing, pp.217-235.
- 宅香菜子 (2004). 高校生における「ストレス体験と自己成長感をつなぐ循環モデル」の構築—自我の発達プロセスのさらなる理解に向けて—心理臨床学研究, 22 (2), 181-186.
- 宅香菜子 (2005). ストレスに起因する自己成長感が生じるメカニズムの検討—ストレスに対する意味の付与に着目して— 心理臨床学研究, 23 (2), 161-172.
- 宅香菜子 (2010). 外傷後成長に関する研究—ストレス体験をきっかけとした青年の変容—風間書房
- Taku, K., Calhoun, L.G., Tedeschi, R.G. (2007). Examining posttraumatic growth among Japanese university students. *Anxiety Stress Coping*, 20, 353-367.
- 渡邊照美 (2011). 青年期における死別経験後の心の発達の内的構造に関する探索的検討 暮らしき作陽大学・作陽音楽短期大学研究紀要, 44 (2), 15-23.
- 渡邊照美・岡本祐子 (2005). 死別経験による人格的発達とケア体験との関連 発達心理学研究, 16 (3), 247-256.
- Worden, J.W. (1991). *Grief counseling and grief therapy: A handbook for the mental health practitioner (2th ed)*. New York:Springer Publishing Company.

—2016.1.28受稿, 2016.3.12受理—



# Giving meaning to a bereavement experience with a personal growth feeling

Kento YAMADA (*Graduate School of Psychology Tokyo Seitoku University*)

Kunijiro ARAI (*Tokyo Seitoku University*)

This study constructs a personal growth feeling scale after a bereavement experience and clarifies the relationship of giving meaning to a bereavement experience with a personal growth feeling. The subjects comprised 149 college students who had a bereavement experience such as family members.

The results were as follows:①A personal growth feeling scale after a bereavement experience consisted of five factors: self-growth, growth in human relationships, breaking away from the sorrow of death, recognizing life anew and contemplation of life and death. ②Focusing on the positive aspects by self-evaluating and understanding that the message of bereavement had a positive impact on the personal growth feeling after the bereavement experience. ③ Focusing on the positive aspects that the bereavement had through the positive impact on the five factors identified above. ④A self-evaluation after the bereavement and its positive impact on self-growth and breaking away from the sorrow of death. ⑤Understanding that the message of bereavement had a positive impact on the following: growth in human relationships, the process of breaking away from the sorrow of death, recognizing life anew, and contemplation of life and death. ⑥Escaping from the memories of the deceased and events related to the death was used to measure as another way of giving meaning as it attributed a positive impact only through contemplation of life and death.

A study of the results revealed that the relationship of giving meaning a bereavement experience and personal growth feeling after a bereavement experience was evident.

**Key words** : bereavement experience, giving meaning, personal growth feeling after a bereavement experience

*Bulletin of Clinical Psychology, Tokyo Seitoku University*

2016, Vol. 16, pp.21-29